

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22530710

研究課題名(和文) 広汎性発達障害における少年犯罪の分析と抑止対策に関する研究

研究課題名(英文) Analysis and preventive measures of juvenile delinquents caused by children with pervasive developmental disorders

研究代表者

神園 幸郎 (Sachiro, Kamizono)

琉球大学・教育学部・教授

研究者番号：70149334

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は広汎性発達障害による少年非行や犯罪の発生原因を明らかにし、予防策を提案した。第1に「いじめ」の早期発見と学校を挙げての対処で二次障害を来す危険性は低下し、非行を防止できる可能性がある。第2に、広汎性発達障害に特有な「こだわり」による行動が非行に繋がる「悪意のない非行」は、教科学習に潜む特有な危険因子を排除した適切な指導によって防止できる可能性がある。第3に、児童自立支援施設に入所中の広汎性発達障害児への指導は、現行の自立支援計画に加えて、発達障害に対する個別の支援計画の策定が必要である。

研究成果の概要(英文)：The present study examined causes of juvenile delinquents in children with pervasive developmental disorders (PDD) and proposed the preventive measures. First, it is important that the bullying was detected early and gotten rid of bullying by the whole-school efforts, in order to prevent the secondary problems and then juvenile delinquents. Second, 'innocent juveniles', which were produced from obsessions in PDD, were prevented by the adequate instructions that excluded the risk factors hiding behind in subject learning. Third, in supporting children of PDD who were registered in children's self-reliance support facilities, it is necessary that individual support program must be formulated in addition to current self-reliance support program.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：広汎性発達障害 少年非行 いじめ 教科書 児童自立支援施設 発達障害

1. 研究開始当初の背景

最近、少年犯罪の凶悪化と低年齢化が指摘されている中で、アスペルガー症候群や高機能自閉症などの高機能広汎性発達障害(HFPDD)の青少年が犯した重大事件が、その動機の不可解さや犯行の特異性や猟奇性のために注目をあび、社会的な波紋を巻き起こしている。

HFPDDにおける少年非行の発生原因を探るためには、障害特性に起因する個人の危険因子と家族や関係者などを含む個人を取り巻く環境の危険因子、そして、それらの危険因子間の相互作用や相乗作用といった3つの観点から分析する必要がある。

HFPDDの一次障害が原因となる少年非行は、対人関心や接触の過誤が触法行為となる事例、モノへのこだわりが高じて窃盗に至る事例など、いわゆる従来型の非行が多くを占める。ところが、親や教師さらには級友のHFPDDについての誤解や無理解という環境の危険因子が作用すると虐待や深刻な「いじめ」が発生し、HFPDDの青少年にとってこれらの耐え難い辛い経験が二次障害としての被害念慮や攻撃・破壊の衝動を募らせる。そして、学校における理科実験や平和学習などの教科や単元の内容が図らずも犯罪の手口のモデルとなって猟奇的な重大事件に発展する場合が想定される。このように見ると、個人の危険因子としての一次障害に比べて環境の危険因子、およびそれらの相互作用としての二次的障害が重大な事件と密接に関連している可能性が推察される。

2. 研究の目的

本研究はHFPDDにおける少年非行や犯罪の発生原因と抑止対策を解明するために以下の3つの観点から検討した。

(1) 少年非行や犯罪の動機に深くかかわると推察される学校における「いじめ」の発生過程を観察し、効果的な対策を考察する。

(2) 少年非行や犯罪の実行行為に影響を及

ぼす可能性のある教科や単元の内容を吟味して、対策を提言する。

(3) 非行少年や虞犯少年を入所対象とする児童自立支援施設には発達障害もしくはその疑いのある青少年が多数入所している。児童自立支援施設における発達障害のある青少年の処遇の実態を解明する。

3. 研究の方法

(1) いじめの実態把握と対処法について

発達の早期から現在まで定期的に行動観察を実施し、その記録を集積している3例と新規2例の合計5例の広汎性発達障害HFPDD児について、学校場面における行動観察を行った。さらに、担任教師と保護者にいじめへの対処法や家庭での様子を聴取した。

(2) 教科及び単元の適切性の検討

小学校の教科書について、HFPDDの障害特性に照らして、内容の適切性を吟味した。

(3) 児童自立支援施設における処遇の実態

全国の58の児童自立支援施設に併設されている分校・分教室の教職員を調査対象とした。児童生徒の学習・社会性・行動の3側面の実態把握に関する項目、指導・支援方法に関する項目、個別の支援計画を含む施設の支援体制に関する項目の全29問からなる自作の質問紙を作成し、郵送法にて調査を行った。

4. 研究成果

(1) いじめの分析と対策

体力測定などの全校的な行事の際などに上級生からの嫌がらせやいじめが確認された。また、同学年の他クラスの特定期男児(A)から対象児の障害特性に焦点化した執拗なまでのいじめを受けたため、この対象児は被害関係念慮を持つようになり、「Aが隠れていて僕を狙っている」と言って怯えるようになった。このように、いじめを受けるのは上級生や同学年の他クラスの成員からの場合が多かった。担任教師や保護者への聞き取りから明らかになったことは、これらの対象児

が在籍するクラスでは、折に触れて対象児の障害特性についてクラス成員に対して丹念に説明がなされていることであった。クラス成員による対象児の理解と日常的な接触経験が「いじめ」を抑止し、対象児への適切な支援に繋がっていることが推察された。一方で、課題となるのは、他のクラス成員や上級生からのいじめである。「いじめ」の事実を早期に発見し、学校を挙げて対処できれば二次障害を来す可能性は低くなることが示唆された。早期に適切な対処がなされるためには、担任教師はもとより校長や教頭そして、とりわけ特別支援教育コーディネーターの役割が重要であることが明らかになった。コーディネーターは「いじめ」問題を校内委員会において全校の問題として取り上げ、対処法を含めた解決方法を模索すべきであることが示唆された。

(2) 教科や単元の内容

調査対象とした教科のうち、理科と保健体育の教科について以下に述べる。

理科の「燃焼の仕組み」という単元を例にとると、この内容は主に火を扱う学習であり、障害の有無に関わらず注意して指導を行わなければならない単元である。まずは、教科書に記載されている「やってみよう」という項目の「いろいろなものを燃やしてみよう」という文面の影響についてである。HFPDDの子どもは想像力の障害により、文面だけをそのままに受け取り、他児と違って言葉の裏側にある意味を想像し補う力が乏しい。つまり、「いろいろなものを燃やしてみよう」という文では、その言葉の裏側にある「燃やしてよいもの・悪いもの」などというものを想像し、理解することが難しく、言葉のとらえ違いがおきた場合、危険な行為へとつながりかねない。火の扱い方などについて正しい事、許されない事などを適切に指導されていれば、この「悪意のない実験的な行為」による非行問題の出現は防ぐことはできると

考える。

その他、保健の「育ちゆく体とわたし」は、性に関する内容を学習する単元であり、教科書や授業内で使用する教材などには、男女の水着姿の写真、女性器、男性器のイラストなどが多く見られる。HFPDD児に特有な視覚優位性という障害特性などから、興味が写真やイラストなどへ集中し、学習目標とは裏腹に負の行動を惹起する可能性がある。HFPDDに対しては、性に関する学習と同時に異性とのつきあい方などについて適切な学習ができる機会を多く設ける必要がある。

理科と保健体育以外の教科においても、同様な問題点が見出された。HFPDDの障害特性の一つである「こだわり」によって生じた行動が非行問題となるような「悪意のない非行」については、学校での適切な指導により防ぐ事ができる可能性が高いことから、学校や教師がいかにHFPDDのある児童を理解し、児童の立場に立って適切な指導ができるか否かにかかっている。

(3) 児童自立支援施設の実態

児童自立支援施設に勤務する教職員が指導上困難を感じる点について「学習指導面」、「対人社会的側面」、「行動面」の三側面について回答を得た。

学習指導上の困難に関して、「学力の遅れ」は「落ち着きのなさ」や「学習への集中力のなさ」などに起因した事象で、教職員の教科指導力のみによって改善される問題ではなく、その原因と考えられる「学習への集中力のなさ」をいかに改善するかという点に工夫を要すると考えられる。また、子ども一人ひとりに応じた興味の開発や教材・教具の工夫など様々なアプローチを経て、集中力を高めることによって、副次的な学力や学習意欲に係る問題の緩和ないし解消を目指す指導計画の作成が必要であると考えられる。

対人社会的側面の指導上の困難については、「共感性の乏しさ」に多くの回答があっ

た。「共感性の乏しさ」は彼らの生活体験の乏しさや被虐待体験などの様々な要因によって、対人コミュニケーションなどを円滑に行うことができず他者感覚が身に付かなかった結果であると考えられる。そのために、相手の気持ちなどを察することができず、相手とのよりよい関係づくりに困難が生じ、結果として表出する「友人関係を築けない」ことも問題点として取り上げられたと考えられる。

行動面の困難についての回答からも、「落ち着きのなさ」(77.1%)、「多動性」(66.5%)、「粗暴な言動・行動」(64.7%)、「衝動性」(54.7%)と注意欠陥多動性障害(ADHD)の特性に合致する回答が多く見られたことにより、先に述べたようにADHDの傾向のある子どもが多く在籍していることを裏付ける結果となった。また「粗暴な言動・行動」が60%以上の教職員の回答に挙げられたことから、教職員も反抗挑戦性障害から行為障害への過渡期にある子どもが多く存在していると感じているのではないかと推察された。

学習指導上の留意点としては、「学力の遅れ」以上に「学習への集中力のなさ」に留意している教職員が多く、教職員も子どもの「学力の遅れ」の原因と考えられる「学習への集中力のなさ」に着目して集中を促す工夫を取り入れ日々の教科指導にあたっていることが分かった。

対人社会的側面の留意点について、回答者の平均値は48.1名(28.3%)と低い値であり、学習指導面に留意している教職員よりも少なかった。このことから、児童自立支援施設で学校教育にあたっている教職員は教科指導について多様なメソッドに基づき指導や支援を展開しているものの、対人社会的側面については学校教育のなかで指導するには時間に制限があり、加えてマンパワーの不足により充足しているとは言えない状況であると考えられる。

行動面の指導上の留意点について、回答者の平均値は先に述べた学習指導上の留意点や対人社会的側面の留意点よりさらに低い値を示した。行動面の指導上困難を感じる項目として挙げられた「落ち着きのなさ」や「多動性」は本調査項目においては、およそ半分以下にとどまった。行動面の指導上の留意点も対人社会的側面と同様に、教職員の専門性によるところが大きく、指導上困難を感じていても、個のニーズに応じた指導を適宜展開することは難しいと考える。

以上に述べたように、児童自立支援施設に勤務する教職員の多くは発達障害が疑われる児童生徒の指導に困難を感じているのに対して、その問題点に留意して指導にあたっている教職員は少ないという現状が窺えた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

杉尾 和美、神園 幸郎、自閉症児の興味を引出し意欲を育てるための指導法～視聴覚機器を利用した授業実践を通して～、Total Rehabilitation Research、査読有、1巻、2014、106-115

http://ashs.asia/?page_id=806

東江 紀幸、神園 幸郎、自閉症スペクトラム障害児における算数文章題の処理過程、Total Rehabilitation Research、査読有、1巻、2014、116-124

http://ashs.asia/?page_id=806

玉城 晃、神園幸郎、児童自立支援施設における発達障害のある児童生徒への指導・支援に関する研究～施設併設の分校・分教室における教育的支援について～、Asian Journal of Human Services、査読有、5巻、2013、64-76

http://ashs.asia/?page_id=710

杉尾 和美、韓 昌完、神園 幸郎、重度知的障害を伴う自閉性障害児の日常生活における問題行動への対応、Asian Journal of Human Services、査読有、3巻、2012、229-239

http://ashs.asia/?page_id=710

中 龍馬、神園 幸郎、高機能広汎性発達障害児に見られる逆行性推論、琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要、査読無、3号、2011、33-43

<http://ci.nii.ac.jp/naid/120004026227>

神園 幸郎、宮里 秀太郎、中 龍馬、広汎性発達障害のある児童生徒に出現するファンタジーへの没入現象、琉球大学教

育学部発達支援教育実践センター紀要、査読無、2号、2010、33-45

<http://ci.nii.ac.jp/nrid/9000237916302>

中 龍馬、神園 幸郎、広汎性発達障害児におけるファンタジー～その特性と対応の在り方について～、琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要、査読無、2号、2010、47-56

<http://ci.nii.ac.jp/nrid/9000237916296>

古堅 亜紗子、神園 幸郎、高機能自閉症児における模倣を利用した社会性障害の改善への試み、琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要、査読無、2号、2010、57-70

<http://ci.nii.ac.jp/naid/120003056637>

[学会発表](計 8 件)

玉城 晃、神園 幸郎、児童自立支援施設における発達障害のある児童生徒に対する指導・支援の検討～全国児童自立支援施設教職員に対する指導・支援についての実態調査より～、日本特書教育学会第 51 回大会、2013、明星大学

村山 愛、神園 幸郎、自閉症児に現れる折れ線現象の実相～心理・社会的な要因との関連性に関して～、日本特殊教育学会位第 51 回大会、2013、明星大学

Koh Tamashiro, Sachiro Kamizono, Study on Supports for Children with Developmental Disabilities in Facilities for Development of Self-Sustaining Capacity, -Questionnaire Method Research on Dormitory Staffs of Facilities for Development of Self-Sustaining Capacity -, Asian Society of Human Services Congress, 2013, Busan, Korea

Koh Tamashiro, Sachiro Kamizono, A Survey on Behavioral Characteristics of Children Registered at Children's Self-Reliance Support Facilities, International conference on convergence Content, 2013, Okinawa, Japan

杉尾 和美、韓 昌完、神園 幸郎、自閉症のある重度重複障害児の日常生活における問題行動に対する対処、アジアヒューマンサービス学会、2012、沖縄

中 龍馬、神園 幸郎、高機能広汎性発達障害児の想像の特性、～障害特性に基づいた想像的所産の清々プロセスについて～、日本特殊教育学会第 49 回大会、2011、弘前大学

神園 幸郎、中 龍馬、広汎性発達障害児におけるファンタジーの特性、日本特殊教育学会第 48 回大会、2010、長崎大学

中 龍馬、神園 幸郎、発達障害のある児童のための「りゅーだい土曜教室」の取り組み、日本自閉症スペクトラム学会第 9 回研究大会、2010、栃木県教育会館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

神園 幸郎 (KAMIZONO, Sachiro)

琉球大学・教育学部・教授

研究者番号：70149334